



若者

## 大学生活を振り返って

大家利彦

私が大阪大学工学部に入学して早くも8年が経過した。学科名も2年前に溶接工学科から生産加工工学科へ変わってしまった。この8年間には色々なことがあった。ここで、入学してからの自分の大学生活および、その時々の方考え方をこの機会に振り返ってみたい。

私が大阪大学に入学したのは昭和56年のことである。新入生には顔見知りまったくない状態で、多少心細く感じた。そして教養部での生活が始まった。これは非常に退屈なものであった。講義は文字どおり講義であり、一度に大人数で行われるため、受身的になってしまいがちだった。しかし中には、小数の学生しかいない講義もあり、このような講義においては、毎回なんらかの問題を解かされ厳しい反面、自分も講義に参加しているという気持ちが強く、また教官が身近に感じられ、楽しいものであった。この頃、通学には、自転車—バス—JR—阪急と乗り継いでいたため2時間近くかかっていたJRといっても福知山線で、列車本数も少なく、時間によっては1本乗り遅れると2時間近く待たなければいけなかった。1年の夏に車の免許をとって半年後からは、自動車通学を始め、そのおかげで、通学時間は約1時間に短縮された。

1年半の教養部生活の後、工学部に移行し、専門の講義が始まる。専門の講義では、受けている人数も少なく（出席者が少ないこともある）雰囲気としては非常によかったと思う。但し、講義内容に関しては「古い」という印象が強かった。

4年生になり、研究室に配属となった。この4年生の1年間が現在でも最も印象深く残って

いる。私は、入学時からレーザに興味があったため、この時、唯一レーザに関するテーマのあった丸尾研を選んだ。研究室配属初日は前年度の論文を読むことから始まる。誰でも配属後しばらくの間は、なんとなく自分の席に馴染めないもので、しばらく論文を読んで飽きてきては周囲を見回し、先輩、先生方と視線があってはまた慌てて読み始めるといった具合である。夕方帰るときにも、帰ってよいものかわからずそわそわしながら座っていたものだ。研究室の実験装置の説明を受けたのがその次の日と記憶している。実際にレーザ発振器に触れたのはこのときが最初で、レーザ起動時、ジェットエンジンの音にも似た、送風器の音に感動したものである（この音は慣れてくると騒音以外の何でもない）。その後、幾度となくこの装置の故障に悩まされることになったが、そのたびに自分達の手で修理し、内部の構造がわかってくるにつれ、愛着さえわいてきた。今年から新しいレーザ装置が入ったためこの装置もほとんど使われなくなるだろう。なんとなく寂しいような気もする。

我が丸尾研では年に6回ほど研究の中間発表的な研究会を開く。初めて研究室に配属された4年生にとって最初の難関であり緊張の時となる。私の場合も、例にもれず、非常に緊張した。数日前から研究会用の資料作りにはいったが、資料の形式もよくわからず困った。特にそのときレーザ関係で4年生単独は私だけだったため、原稿を書いては見てもらうことを繰り返し、資料はなんとかできあがったものの、研究会では結局自分でも何をしゃべったのかよくわからないといった有様で、この時の緊張は、年度末の卒論審査会、最初の学会発表に匹敵するものだった。その後、しだいに研究室の雰囲気にも慣れていき、年度途中で研究テーマが多少変化し

\*大家利彦 (Toshihiko OOIE), 大阪大学大学院, 工学研究科, 後期過程3年, 溶接工学専攻

たりしたが、先生方の適切なお指導もあり、無事卒論も書くことができた。

修士過程での研究テーマについては、M1（修士過程1年）の時に4年生の実験を共にやっているうちに自然と決まった感がある。これが博士過程での研究テーマになった。このM1の1年間は非常に有意義であった。4年生の時と違い、研究においても普段の生活においても割とマイペースを守ることができた（年度末の論文の手伝い時期を除く）。また、研究においては4年生のころと異なり、ある程度予測しながら行うことができた（と、自分では思っている）。この時期の1年の差は大きいものである。この頃からテニスを始めた。今でも時々練習をしているが、なかなか難しく上達しない。最近では研究室全体でテニスを楽しむようになり、年2回研究室主催のテニス大会も開かれている。

M2では、4年生に対する責任も大きくなり、また、それまでほど細かな指導を受けることが

少なく、意外に苦勞し、研究方針の決定の難しさを痛感した。初めて学会で発表したのもこの年である。そして、いよいよ博士過程となる。進学に際しては、専攻コースにここ何年か進学者がいないことで思案していたが、私の場合、博士過程に進学することはかなり前から考えていたためそれほど悩むことはなかった。

博士過程に進学してあっという間に2年が過ぎた。博士過程と言うことで行っていく研究もより高度なものである必要があり、何度か悩んだこともある。一時体調をくずし、休養したこともある。4年生の指導についても、勉強と実験、主体性と能率それぞれの両立が難しい。この2年間を振り返ると必ずしも満足できるものであったとはいえないが、いずれにしても、これまで行ってきた自分の選択が正しかったのかについてはあと数年の内に結論が出るはずである。その時に現在の事をよい思い出として振り返ることができたら、と思う。

